



枇杷園句集

乾



石印

士解先生以力在疎疎亦意
翁之風至十元無馬能為
在城市不常遊兵知實
正名曰憲皆自名于南曰朱
樹一松赤松樹身掩以新西
曰松杞園殊而角一不

彈ス四ニ絃ヲ如シ珠ノ後ニ盤カ如ク也ニ或
稱ス琵琶ヲ國ノ主ト人ト少ク日ヲ錄ス焉ト
黃ハ鸞ノ亦ハ爲ル也ト在ラ東ノ國ニ望ミ山ノ月ト
猿ノ山ノ新月ノ影ヲ升ル庭ノ樹ト
先生ノ對シ之ト曰ク是レ吾ノ煙ノ雲ノ如ク
麻ノ也ト美シ貴ク一ニ殊ニ出ル存ス

下ニ故ニ志ヲ亦ハ取ル家ノ多ク嘗テ梅ノ酒ト
唐ノ又ハ以テ西ノ山ノ嶽ヲ而得ル之ト先生ノ
之聲ヲ其ト之勝ヲ相ノ忘ル矣ト
此ノ集ノ則ハ字ノ如ク桂ノ出ル蓬ノ蓬ノ雨ト
辛ノ洋ノ松ノ見ル不レ朝ル也ト有ル集ト
謂フ余ノ病ヲ顧シ年ヲ先ニ生ト

浮年久遠心少題其
 集而狀其行也
 文化甲子秋桂子
 望之句并

枇杷園句集卷之一

春

年内立春

水々々々年内立春の素よりとす

歳旦

何古又もあくて春事あしと云

元日子白

松をすこちのほけり水花のす



侘おししくさうそちぬの十葉

賀

少くはむや年くま年の義き

若菜

老々はむ父の葉をひとのりひ

古のつりふさ

さくら花ハ簪の子もを家梅の葉

葉

睦月宵此夕れ梅村空のふさ

ゆくに梅の生垣引をりあふ半に

このも一き葉電あむや月の西

へるさ一さくしきやそ葉を

お半る

世口すれに葉おらん月と梅

梅

戻山を月白くお来るもの花

花さかぬもの梅をふぬ目さかると
江の上や二入しとさる梅のま肌
白梅の大ききさなるを中らち

筑州山鹿のさか秋枝氏

求子ありしもの急出すや

いふまを

殆のい少しも香よ白ひりも梅の花
手さかきり人のあるうめを食

九岳亭

うめうやさ藪の中まで掃ちきり

初来りし

買之のうまのまらそうめの花
梅うやうけちるも音月お

芭蕉公翁肖像開眼

眼毛 白髭毛
うめを食

ひらう勢あ

月前

かみ半も影や北窓木のうめの花

暮雨菴法會

あゝめハミハ暮れ余の白ひり那

五十八山の麓六十八山の半後七の

山路大後よハあねやそらうく

まゝあるはくそまさをるせ

山よぬるまじすまあるも梅の下待ひ

塔る

ほろしし塔る喜しく峰の松

塔るにまゝのうくるゆめをのち

ゆめしきくし只塔るのちくろふ

山の小ニ使にまゝの来り

きりりして庭掃のをとる

昔よりなれし

塔るまじりち梅の垣の

夢の平清盛の水たつらぬ
とこてやら夢のあさぬを此月

柳

まら柳にうき世の垢はあうらむ

伊勢よて

まら柳のあめや小あひとら口

まら柳や暮て啼猿淀の犬

矢矧よて

喜柳の東海は六百里の那

あ草

われよ句あしあの子にゆる塘

雲

少しあのはくくをゆくんこ

古きものこらんあほりぬ朝うんこ

初瀬

朝螺貝の初瀬よとらぬあうな

春雪

春のちかき雪のさけぬ枝よあし
旅人よちかき雪もすぢのちか
出山よき

消のこもちかき雪もあそびの子供に

春風

大佛のあめをりんよゆくたるを死

春風

明日もおんあめも神よおん春の風
ちかき風やちかきあそびの擗うさ

春風

柳をよき風しんよゆくたるを死
ちかき風やちかきあそびの擗うさ

春月

春の月雉をよき風しんよゆくたるを死
春の月松よこもちかきあそびの擗うさ

糊丁ぬきもるうち也其の月
元

しーくやむさやの北新一跡
起くよむ見るやその業付け
お来るを元と自とこそ目ざれ
元といふこと

あゆみよの庵やさくしんく
虎足菴

はくしんを見てあれをぬる楊子

芭蕉堂新成矣

肖像安置しまりて

蝶ももろぬやまけちりいぬみけ

贈吳丹

ふんしんはくしんもよむのふ
宇はの山みさ

ふんしんはくしんもよむのふ

向半さきき 芭蕉人のあつらうな

山野行

甲子吃行に日ひりりし 花おろり
たよりうまのまこと山深く白雪
峰にすまり 烟る谷を埋んでせし
色もさる其雨ふるも降出のおほつり
たよさ欠さをか入るうとくくふ
はあめとくく 笑神をさちうり

山をくさるはらうく此つあり 菴のさめ
清水のやうを見えるよとくくのさる
んよひさのさぬる 花神は清し
芭蕉のぬのあつらうは世まうを
とのふひるを思ひおるり 花を
さくろふさけさぬさねをさつら
訪ひ来るもは清さをけうへく
おろしすうに 常住の月澄さる

いしをみたりぬるし

世を捨つあつし
山路は

山嵐山

松さくく一木置ちりあし山

死七白もあしくはさぬ嵯峨の者

ぬきし嵯峨よ申さして

はしれりしをとおへるあけ

木母寺

花よ鉦いりある罪れほろふらん
年々に花の見やうのかつらり

眉山の花見むかし豊宮崎の文庫
をさるる山にほひさる山村をよま
うるも神ふか入る山のやうそまゆまや
とさへおも花をねん

花の木にむすむしりける花も

帰路

ちののりいんくもてる山路哉

あらの土ハ涉喰ふ土ちやよ

海よりちやとせしうさゆく

ちよと女よああ内さいせいの亭酒の

神宮う詣り

焼 燼の亭酒のさくら

さくらさくら

玉登行

玉登のやうをみるに志つらぬるを辨せ

しるの淋しきを用作りする農

橋小啼水の山石にあせふるにづれる

淋しうささんさ水を辨ハ一みして

用ハ百千にわらる百千にあそふ人程

多しとせ守況や一よあそふ人程

世あそふより住よりさるのや住る人

上

+

もやあんちいさね松の菴ふ文社の外
見るものあつくかこいふた回しさむし
半る僧のありけりるる宗を考するにり
まる人よてぼらむあやうと回しとち
見半しものこよものもいふをゆら
やあしすの標とそこの店よ庭うけて

二苑の石しまも宗ありてわいせ
いしやおふんふかかく中お侍らぬを

いへはゆれうしすうとてこのはげれ
智える僧の戸をさこしとめひるあそ
いへはゆれろを床しゆれ日を要た
かこれえの見るものよち終くしし
小倉の山北をくらまの木の畠

こもちりんる

新夜やおほつらあふゆいせん

と口をさのみなれこのの僧のあまらひ

茶のよろきやしてこの侍もさしはしとて
まうられまゝいとしうれくさうあぢ
いづとぬ

涅槃會

あはれとた見たりふれひの佛に
道人のまゝして申さぬ涅槃木像
新買にゆくひとそへも祝をん哉

茶花

茶の花よ大名くゆる林廬のま

桂五亭

茶の花にらめよすめの柿云
かくいひくれとも親すあまを
させるともいひも見てす子雀ハ
いんたふぬまの

茶の花に口もしそあまの侍雀
梅は肥るや茶の花を吸つぬまをし

蕪入

蕪入や小ささおをうちの

帰鳥

三夜二夜あつ絶えぬよ

西湖

いよ一度あつ田よあよの

態谷よて

るさしよ入る態谷豊ん塘の

態

はまうとまれの態ゆき態と

堂

をみまけけけ一人形をこはり

几巾

風巾うけささみさおの様

蛙

字一はせおのきを帰蛙

人もふえのつもふしよの山あり

燕

乙る曲原係もあらぬ小白うち
空木はむ中を燕の往來は

雛

かへままこり啼しう焼の雛の奪
ほろとハ花よ雛あく柏子裁
つるつるしとハ又あくるきとに裁

幻住 葵電よて

松中少の雛ゆりくるよ 葵電のあめ

雛

ひなのかる花のうけよとこころあぬ
すめりも来るや雛の膳まつり

桃

伏えみと日られて来るうめあ花

以テ 久能山の麓よりの

びんしんもきりきりきりきりきり

藤

藤のちりちりきりきりきりきり

実半日此宋をゆきあるし半日の
宋を夫ふきれたる宋はゆききりきり
小原のやねよともちひきりきりきり

ゆききりきりきり後世菩提の修りきり
宋をゆきに忠告をきりきりきりきり
菴のうちに松の枝折るる半日
の樂ハ主人もゆるしきりきりきり
竹堂に琴を弾て月をのぞききりきり
ゆききりきりきりきりきり

山々藤の柳きりきりきり住居

題しらす

ぬるけり少く強き素より其の所
父母のあつしうを休になくすめ
羨しき砂に小松のみとりを
月甚をたもみ見られた松の風
花とりやさうても竹をみるりえ

善光寺に無むいしものさる人の

念佛の考ハヤク風月多くひまらぬ
半く一歩明かすに見れハ老る
ひと半にさうしよまてに佛の手とせ
まはたてそと見申振子らぬ事
元の袖うちたふさしよまてくよ
不ひかす群集しるるそか
あす

朝ぬく風掃かきぬまら

暮春

あさくはさきしきゆく花の門
ゆく春をあたれむ竹の目影

椿堂輯

枇杷園白集卷之三

夏

更夜

ふふふとハ父のまの着人更云

老慵

又云人のきしきにおとるまぬ

卯のちぬ

卯のちぬもーらま子垣ゆら男らあ

時るる

義しきもあやうきものなりとて
即ちあす思ひ控ても月おのち
むらるるむらるる時るる
住ししの橋くさくさなりとて
中たやまふゆはこもあれ時るる

嘗提山堂堂よみ

念佛を米かむやうにほしとて

ちりぬるよそ一たふの即ちあはれとて
大草は砂の風ぬたゆまこよひぬ
月強きあまほしみまほしとてあすの
来るるよそしこちりとして二三の
例の瓢箪来て松下の傍に壺の足
やりちりぬ
追よひ誰をやらうか即ちあはれ

糸紫

牽きつやいしやうとてさうらふ糸

此堂殿よみ

此堂前をつくる神のつら糸糸

茂

くくく水脈の流こむ茂り糸

備佛

尾花う崎をゆらめく糸

かほくは藤ゆくひよ糸

とてむらの上に出望し糸

花水堂をけさく糸

こまけく糸の佛をくま糸

竹子 蛸手

中しけのみや子供多てこむ寺の所

既こまた竹の子をりふお糸

伊勢うまひきの糸 踏こり 蛸手

牡丹

とくくく牡丹つりとむ堀の内

當茶

ふ六代當茶 けくる山あうち

苺子

白き〜に窮屈なまきいふあうち

あ〜〜さうの又受あうち〜

苔花

苔と怒るや 花雪ぬ 煮りちぬ

諫鼓鳥

采志るすうのあす〜とれ花の中

蚊帳

連日のおめあ

日中くるま〜

寐きこ〜

餅ひろふやすめああ〜く蚊屋のお

心算

宵の更や大牛原をゆく所

粽

此處やむうしちうのさし 粽
うねきといらもぞとくちまかひ

五月雨

五月雨のいせふ陸もさしつかた

萱津の里

さみしけりやめた屋の堀る鶴は

栗手の赤

ひしりあつ陸の白さとみ月る

竹酔日

半け植る日もひるのちなる植ひる
竹くゑこのまじ植よりうさきたる

赤あまの庭を人の住居もさしぬく俗

ありやいふに人めとの後末を
こゝろて俄に小さた竹を植られ
におゆるおんといふの事なほ
半しけり急にわらひ魚の事なほ

まき山

却てそぬるこておぬゆる風

まき山

う急てまき山田をぬぬある

いせ吉兵衛う茶店小あふ

田を植ふひともうへつぬいさ

松うのふま

雨まの垣鼻ゆけいさ田うま

小籠

さゆよへハムあ啼かるつ子の所

古井のきと雨く風く真う

あゆりせし小籠の小田ゆらふ

紫陽花

はな跡をよるやこととるの木の

夕ぐせ

夕ぐせやもさへけき老の杖

船川

待知せもなくさゆく船舟

余の死山の麓ふさぎ

静の如くし清き舟長き舟灯の

短夜

みしるおやみ屋たぬる世の露

夏月

太秦をみみたるなり夏の月

夏の月ぬきくくもゆるみ

園扇

光琳

ちとりの啼き

古園扇

清み

塔の北麓の糸を綴る清み

蟬

蛭の口搔き蟬まぐ木うけりま

蓮

夏詠ふる沙のこころよ草の巻

暑

あつこ日や小庭のまゆふゆり

大蟻のたごをあつこあつこ

蟬

乃ちこゆけり撫子たごあつこ

夕さち

夕さちやぬき火を焚き露のま

納涼

あつこ—北さみりるるこ粟と得
みこぬきす—き月のま—る

檀溪

す〜きた人の来ぬるす菴うち

丙午此二年六月未嘗にゆまぬ谷の
ひましく雪をほと松原のおく花を
孫〜もりの四時のけ〜きひと〜と
のこるものれ〜何そ別に仙境を
尋すのむ

山〜たあのみさよ未嘗のなをみ

此坂

市後〜もりのちや花いろ此は坂

宇洋輯



